

幼児期の発達と親の関わり

－「TK式幼児発達検査」からみる園児の特徴及び親の関わりと発達について－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
片山 壽子

本研究では、幼児の発達の特徴を、3年間の縦断調査の結果から明らかにすること、また子どもの発達に最も影響を及ぼすといわれている父親や母親に焦点を当て、幼児期の発達と親との関係について明らかにすることを目的とした。

研究1では、子どもの発達の特徴を捉えるために、生活能力と生活習慣の発達検査を実施し、3歳児クラスから5歳児クラスに至る3年間の縦断研究により、基礎統計量の推移をみた。さらに一般線形モデル－反復測定による統計的検定を実施し、学年による変化や、男女差について検討した。その結果、子どもの発達は年齢相応にみられたが、いくつかの発達の偏りも見られた。「運動能力・身体移動能力」の発達の遅れと、「生活習慣」の自立の遅れである。子どもの発達は幼稚園に入園した3歳から4歳にかけて大きく伸びることが明らかになり、男女間では有意差が認められ男児の方が低い事が分かった。

研究2では、親の関わりと子どもの発達の関係について検証した。親の質問紙調査結果と子どもの発達検査の結果を、相関係数と重回帰分析を用いて分析した。その結果、父親の関わりと子どもの発達の間相関係数では、「からだのこなし」「自己統制」が有意であるものの「生活習慣」においては有意な相関はみられなかった。母親の関わりは「生活能力」のすべての項目に、「生活習慣」でも「衣服の着脱」以外のすべてで有意な相関がみられた。さらに重回帰分析では、母親の関わりで大きく影響を及ぼしているのはコミュニケーションで『言葉』『集団生活』『自己統制』『自発性』、父親の関わりで大きく影響を及ぼしているのは躰で『からだのこなし』という結果であった。しかし、父親の世話は「からだのこなし」「自発性」にマイナスの標準係数ベータが示された。

研究1および2の結果をふまえて以下のような考察がなされた。「運動能力・身体移動能力」の発達の遅れについては、子どもを常に安全な囲いの中に置くのではなく、積極的に子どもが自由に運動できるような場所を確保し、危険な物があれば取り除き、思う存分動き回らせるといった環境と配慮が必要である。与えられることだけで遊んでも、自ら自分の安全を守り、危険を回避する能力は育たないと考えられる。また親の関わり方については、子どもとの間に相互作用を生じさせ発达到に効果があった。このことから、「信じて見守る」ということばがある。親が「よかれ」と思って、すぐに手や口を出すのではなく、少し距離を置き、時間を取って、子どもがしている事を尊重する態度が重要である。

これらをふまえた子育て支援の有り方として、「子どもの育ち」だけではなく「親の育ち」も支えることが重要であることが示唆される。家庭と保育者が支え合い助け合いながら相互に子どもの成長・発達を見守る体制が必要である。成長・発達するのは決して子どもだけではなく、保護者や保育者も同じように子どもを通して変化していくという視点での、子育て支援が必要である。